

9.3 教育内容・方法

9.3.1 カリキュラムの編成

【評価項目 6-1-1】 教育課程

- (必須要素) カリキュラムの編成方針と教育理念・目的との関係
- (必須要素) カリキュラムの体系性と教育理念・目的との関係
- (必須要素) 学部に基礎を置く大学院研究科における教育内容と、当該学部の学士課程における教育内容の適切性及び両者の関係
- (必須要素) 修士課程における教育内容と、博士（後期）課程における教育内容の適切性及び両者の関係
- (必須要素) 博士課程（一貫制）の教育課程における教育内容の適切性
- (必須要素) 課程制博士課程における、入学から学位授与までの教育システム・プロセスの適切性
- (選択要素) 創造的な教育プロジェクトの推進状況

【評価項目 6-1-4】 単位互換/単位認定等

- (必須要素) 国内外の大学等との単位互換方法の適切性

【評価項目 6-1-8】 生涯学習への対応

- (選択要素) 社会人再教育を含む生涯学習の推進に対応させた教育研究の実施状況

【評価項目 6-1-11】 独立大学院の教育課程

- (選択要素) 学部に基礎を置かない独立大学院、独立研究科における、下位の学位課程の教育内容・レベルを視野に入れた当該課程の教育内容の適切性

<2003年度に設定した目標>

言語コミュニケーション文化に関する研究の進展に伴い、学会での最先端の研究を視野に入れながら、社会のニーズにも対応した先進的カリキュラムを策定してゆく。

1. 日本語教育専門家を任用し、日本語教育に関するカリキュラムを新たに立ち上げる。
2. ドイツ語、フランス語を中心にヨーロッパの言語文化のカリキュラムを充実させ、ヨーロッパ圏の言語文化領域の入学者数の増加を図る。
3. 中国語・中国文化関係のカリキュラムを新たに導入し、アジア言語文化領域の研究を追加する。
4. 後期課程の研究指導を更に充実させるため、必要な後期課程担当教員を増員する。

(現状の説明)

1. 教育課程

(1) 博士課程前期課程

前期課程では、言語コミュニケーション文化を総合的に研究するため、従来の研究領域を超えた、先進的・横断的で総合的なカリキュラム体系を編成している。

教育課程は、本研究科の教育理念・目標である、言語コミュニケーションを基盤として相互に密接に関連した三つの研究領域（「言語科学」「言語文化学」「言語教育学」及びそれらの「領域研究科目」）とその核となる高度な言語コミュニケーション能力養成のための「共通科目」から成り立っている。そして、これら三つの研究領域それぞれに、修士論文コースと課題研究コースを設置し、研究者ならびに高度専門職業人を養成している。

授業科目の配置においては、それぞれの領域研究を進めるうえで、その根幹をなす

言語コミュニケーション能力の養成を目的とする「共通科目」と、その「共通科目」を核として三つの「領域研究科目」を配置している。「共通科目」には、英語ネイティブ教員が担当する英語運用能力養成科目と、日本人教員によるフランス語とドイツ語運用能力養成科目が設けられている。「言語科学」領域では高度に発達したコミュニケーション体系としての言語の普遍的・個別的研究を行う科目、「言語文化学」領域ではコミュニケーション体系としての言語によって支えられた文化を研究する科目、「言語教育学」領域では言語コミュニケーション能力養成の方法論の研究を行う科目を配置している。またそれらに加えて領域ごとに学生個別の研究を指導する「演習科目」（「研究演習Ⅰ」「研究演習Ⅱ」「課題研究」）を配置している。

区分	1年次		2年次		修了必要最低単位数		
	春学期	秋学期	春学期	秋学期	修士論文コース	課題研究コース	
共通科目	必要な科目を選択して履修する。				10	12	30
領域研究科目	選択したプログラムに関連する領域研究科目を履修する。				12	16	
演習科目	研究指導担当者（演習科目担当者）を決定	<修士論文コース> 「研究演習Ⅰ」・「研究演習Ⅱ」（通年・各4単位）を履修する。 <課題研究コース> 2年次秋学期に「課題研究」（2単位）を履修する。			8	2	

(2) 博士課程後期課程

後期課程においては、前期課程のカリキュラムの核である言語科学、言語文化学、言語教育学という三つの領域科目を基礎としながらも、言語コミュニケーション能力の理論的解明に特化し、「言語コミュニケーション文化学」を体系化した、理論的かつ実践的で、より高度な研究・教育を行う。

アドバイザー・コミッティ制度のもとで実施される二種類の研究指導によって、博士論文作成の指導を行う。後期課程には授業科目を設置せず、博士論文作成に向けての研究指導をきめ細かく行う点が特徴である。研究指導は、アドバイザー（研究指導教員）による個人指導（言語コミュニケーション文化インディペンデント・スタディ）およびアドバイザー・コミッティによる集団指導（言語コミュニケーション文化セミナー）の2つをリンクさせて、研究指導の相乗効果を挙げ、博士論文作成を支援する。

博士論文の提出に先立って、2年次に博士論文概要及びこれまでの研究発表の内容について、博士候補者資格審査委員会による審査（口頭試問）を受け、これに合格すれば、博士論文を書く博士候補者資格（Ph.D. Candidacy）が与えられる。なお、審査を受けるためには、全国的学会で研究発表を1回以上行っていることが条件となっている。

候補者が博士論文の提出までに、全国的な学会で研究発表を2回以上行うとともに、学会誌などレフェリー制の研究誌に投稿し、論文を2本以上発表することを義務付けられている。学生はこの2本の論文を基礎とし、それをさらに発展させたかたちで、

後期課程入学後3年以内に博士論文を作成することが期待されている。このように博士論文作成における各段階でのチェック体制と指導システムが確立している。

2. 単位互換/単位認定等

関西四大学大学院（関西大学、同志社大学、立命館大学、本学）との間で単位互換の履修制度を設けている。本研究科学生の実績はないが、他大学院学生が本研究科の授業を履修している。「バイリンガリズム特殊講義」、「応用言語学特殊講義」、「音声科学特殊講義」等の他研究科にない専門分野の授業科目を履修する者が多い。

3. 生涯学習への対応

開設当初より現職教員、企業等での有職者、退職教員等の入学者が含まれ、社会人再教育、生涯教育に力を注いでいる。特に交通至便な大阪梅田キャンパスでの夜間授業は、これらの学生のニーズに応えている。

（点検・評価の結果）

1. 前期課程では、多様な入学生を受け入れており、学生が研究しようとする分野やテーマもさまざまである。そのためこれらの学生を指導するには、研究テーマに必要な周辺知識を教授することが必要となっている。同時に、各担当教員には自らの専門分野を教授するほか、学生の研究テーマを支援する方法、知識や技術が必要となっている。

2. 後期課程の目標は、集団指導のセミナーと個人指導のインディペンデント・スタディによって、前期課程に引き続き、論文作成、発表等の能力をさらに育成し、博士論文作成を指導することである。2005年度まで博士候補資格者が2名審査に合格しており、順調に指導が行われている。

3. 本研究科は、各学部の英語、フランス語、ドイツ語、中国語担当の言語教育担当教員が中心となって構成されているが、カリキュラムは、英語中心のカリキュラムになっており、他の外国語ではフランス語とドイツ語の科目が共通科目として入っているに留まっている。

また、英語関連科目を含め、言語文化領域を中心に履修希望者のいない授業科目、研究演習・課題研究が出てきている。研究科の目指す人材育成目標に合わせて、研究科教員の専門教育範囲と分野を入学生の研究分野に近づける努力が必要となっている。また言語文化に関心のある学生を入学させるよう募集段階での工夫が必要である。

4. 前期課程の研究演習は通年で開講しているため、留学者や休学者、教員の留学等への対応が柔軟にできていない。課題研究での課題研究論文作成の指導は、論文を書く最終学期ではなく、論文の構想を練る段階（2年生春学期）からの指導が必要となっている。

（改善の具体的方策）

1. 今後は、既存のカリキュラムを見直し、研究科の全教員の潜在能力が十分発揮できるとともに入学生のニーズの高いカリキュラムを開発していく。特に、前期課程においては、外国人に対する日本語教育者を育成するプログラムや英語以外の言語（フランス語、ドイツ語、中国語等）の背景とする文化コースなどのカリキュラムを検討する。

2. 言語文化領域に関して、「言語文化」の新しい考え方を共有するために、「文化」を切

- り口に共同プロジェクトを立ち上げ、現代的でニーズの高いカリキュラムに改編する。
3. 2006年度から前期課程の研究演習は4単位×2年を2単位×4学期に、課題研究は2単位×1学期を2単位×2学期とするよう学則改正を行う。

9.3.2 教育・研究指導のあり方

【評価項目 6-2-3】 社会人学生、外国人留学生等への教育上の配慮

(必須要素) 社会人、外国人留学生に対する教育課程編成、教育研究指導への配慮

【評価項目 6-2-4】 研究指導等（学生の研究活動への支援を含む）

(必須要素) 教育課程の展開並びに学位論文の作成等を通じた教育・研究指導の適切性

(必須要素) 学生に対する履修指導の適切性

(必須要素) 指導教員による個別的な研究指導の充実度

(選択要素) 複数指導制を採っている場合における教育研究指導責任の明確化

(選択要素) 教員間、学生間及びその双方の間の学問的刺激を誘発させるための措置の適切性

(選択要素) 研究分野や指導教員にかかる学生からの変更希望への対処方策

(選択要素) 才能豊かな人材を発掘し、その才能に適した研究機関等に送り込むなどを可能ならしめるような研究指導体制の整備状況

(選択要素) 学生に対し、研究プロジェクトへの参加を促すための配慮の適切性

(選択要素) 学生に対し、各種論文集及びその他の公的刊行物への執筆を促すための方途の適切性

<2003年度に設定した目標>

1. 前期課程の研究演習、課題研究及びその他の科目の指導方法を再検討し、さらに充実した指導を行う。
2. 後期課程の言語コミュニケーション文化インディペンデント・スタディおよび言語コミュニケーション文化セミナーの指導方法を再検討し、さらに充実した指導を行う。

(現状の説明)

1. 社会人学生、外国人留学生等への教育上の配慮

教育方法としては、原則として Semester 制を実施しているが、通常の昼間時間帯の授業に加え、社会人学生を考慮した、大学院設置基準第14条の教育方法の特例による昼夜開講制の授業を実施している。

社会人を対象とした課題研究コースを設定し、都心の大阪梅田キャンパスで夜間授業を実施している。また入学時に決定したアドバイザー・コミッティ（アドバイザー・指導教員1名及びサブ・アドバイザー2名から構成）の指導も、授業時間外のオフィスアワー、年2回の土曜日開催の相談会、メール等を使った指導など多様な方式で行われている。

外国人留学生に対しては、必要に応じて指導教員のほかにもう1名の指導補助教員を加えるなど、柔軟に対応している。

2. 研究指導等（学生の研究活動への支援を含む）

(1) 履修指導

入学前に『大学院要覧』、本研究科『履修心得』『シラバス』、時間割などの履修に